小林秀雄と初期『藝術新潮』

鈴木美穂

一

小林秀雄は、日本近代文学における〈批評の確立者〉として確固たる文学史的、文化史的地位を保ってきた文学者として認知されている。二〇〇〇年以降に限っても、二種類の個人全集刊行、書店での文芸棚特設コーナー設置、また、新聞のコラム等での引用も頻繁になされる存在であり、大岡昇平によって名づけられた「人生の教師」という呼称に象徴される小林秀雄の評価は、まさに〈神格化〉され、大学受験現代文の出題典拠の常連から消えて久しいものの、今もなお〈国民的批評家〉という称号がふさわしい存在と言える。

しかしながら、どのように小林がそのような地位に就き、その影響力を維持させてきたのか、〈神格化〉＝正典化のメカニズムを分析することは、アジア・太平洋戦争敗戦後の文学・文化生成および〈文学史〉の枠組み構築の過程解明に繋がる重要な研究課題にもかかわらず、これまで本格的になされることはなかった。その要因は、戦前の小林秀雄の批評活動が文学をそのフィールドとしていたのに対し、戦後は、音楽や美術といった非言語芸術、哲学・思想の分野へとその対象を拡大したことが大きく影響していると考えられる。

戦後の文化状況の激変を背景に、小林は一九五〇年代にかけて集中的に文学と音楽／美術というクロスジャンルでの〈新しい批評〉を目指したと言える[1]が、これらの批評を紐解くことは、現代日本の文化生成過程解明にもつながるものと考える。

そこで本稿は、その中でも〈美術〉を対象とした批評の発表舞台となった雑誌『藝術新潮』に焦点をあて、その関係性を検討したい。

二

戦後の文学場における小林秀雄をめぐる言説は、戦後間もなく、『近代文学』派らによって、提出されたことに始まる。本多秋五「小林秀雄論」（『近代文学』一九四六・四）、平野謙「昭和文学のふたつの論争」（『人間』一九四七・一〇）等では、「戦後の新しい文学」の出発点かつ学ぶべき対象として小林秀雄が語られていく。小林秀雄は戦後の出発点において、学ぶべき戦前の象徴として〈神格化〉され、〈昭和文学史〉を構築する上で軸とされていった。

ところで、戦後、様々な文学賞が復活・創設されたが、小林は日本芸術院賞（一九五一・三、『小林秀雄全集』）、読売文学賞（一九五三・一、「ゴッホの手紙」）、野間文芸賞（一九五八・一二、「近代

繪畫」）、日本文学大賞（一九七八・六、「本居宣長」）を受賞し、文化功労者（一九六三・一一）となり、文化勲章（一九六七・一一）を叙勲している。戦前、一九三〇年代創設の各文学賞が新人の養成を期待するものであったのに対し、戦後の賞の多くは「大家」認定を志向した、〈近代文学史〉構築に寄与するものだったと考えられるが、小林が各文学賞を一九五〇年代に集中的に受賞している点は、注目に値する。[2]

これら文学賞受賞は、小林秀雄論を一層流行させることになる。その象徴とも言える江藤淳「小林秀雄」（『声』一九六〇・一～六一・一、『文學界』一九六一・五～一二）は、大岡昇平が書評「江藤淳『小林秀雄』」（『朝日ジャーナル』一九六二・一・二八）で明かすように、「小林秀雄が共通の文化財産になりつつある今日」に、「資料をいつまでも死蔵しておくのは」、「公正ではないのではないか」と「自責を感じ」たことから、大岡が江藤に資料と発表の場の提供をしたものとなっている。小林秀雄に非常に近い人物による、「文化財産」「小林秀雄」の構築への関与[3]と言える。小林秀雄が戦後のこの時期に批評空間と各賞の受賞によって、〈批評の確立者〉としての文学史的地位を確立していった過程については、別途検証の必要があると考える。

ここでは、自ら過去の批評活動を整理し、刊行した全集で芸術院賞を受賞し、また、〈新たな批評〉形式への挑戦とも言える、「ゴッホの手紙」や「近代絵畫」で賞を受賞している点、さらに、小林秀雄をめぐる言説の流行との相乗効果によって、〈批評の確立者〉としての文学史的地位の確立をしている点に注目しておきたい。

三

戦後、文化状況は激変した。占領下で制限されていた洋書輸入は一九四九年に再開され、海外文献も入手可能となった。

美術をめぐっても、一九五〇年前後には神奈川県立近代美術館（一九五一年）、ブリヂストン美術館（一九五二年）、国立近代美術館（一九五二年）、国立西洋美術館（一九五九年）等、公設私設ともに、〈近代〉美術館の開館が相次ぎ、西洋美術を中心とした海外美術展の場として機能した。絵画に触れ得る機会は激増し、ある種の文化的飢餓状態が解消された。

一九五〇年代はこのような状況に加え、朝鮮戦争による特需景気やサンフランシスコ講和条約によって、海外美術作品が直接、大量にもたらされる道が開かれた。海外美術熱は高まり、「現代フランス美術展―日仏美術交換　サロン・ド・メ日本展」（一九五一、高島屋）、「セザンヌ、ルノワール展」（一九五一、神奈川近代美術館）、「ピカソ展」（一九五一、高島屋）、「ルオー展」（一九五三、東京国立博物館）、「フランス美術展」（一九五四、東京国立博物館）、近代美術中心の展覧会が非常に多く開催されている。[4]

そのような状況と呼応するかのように、美術をめぐる雑誌メディア状況も大きな変化が認められる。『みづゑ』復刊（一九四五年）を皮切りに、『三彩』（一九四六年）、『美術手帖』（一九四八年）、『藝術新潮』（一九五〇年）『美術批評』（一九五二年）等の新雑誌創刊が相次いだ。

中でも、一九五〇年創刊の『藝術新潮』は、ジャンルの枠組みを超え、総合的・横断的な「芸術の総合雑誌」をめざした新しい試み

であった。

実際、初期（一九五〇年代）『藝術新潮』の誌面は非常に多岐に亙る（表参照）。その傾向を大きく纏めると、以下六つの傾向が認められる。

① 戦後の新資料による西洋近代美術の紹介・再評価

「ピカソ展」（一九五一・一〇）や「ゴッホ展」（一九五八・一〇）等各展覧会や「一九五一年のピカソ」（一九五一・三）等の個人作家に関する特集。また、アンドレ・マルロー「東西美術論」（一九五〇・一～五六・一〇）、和辻哲郎「イタリア古寺巡礼」（一九五〇・一～）、小林秀雄「ゴッホの手紙」（一九五一・一～一九五二・二）、「近代絵画」（一九五六・一～一九五八・二）[5] 等の文学者らによる批評の連載。

② 戦後美術の紹介・批評

「現代日本美術展」（一九五〇・七）や「アンフォルメル」（一九五七・一一）をめぐる座談会の他、吉原治良「具体美術宣言」（一九五六・一二）等。

③ 建築・デザイン・工芸

座談会「現代建築」（一九五四・三）、「二〇世紀のデザイン」（一九五七・三）等。

④ 芸術をとりまく問題の検討

特集「日展を批判する」（一九五四・二）、「文化勲章の内幕」（一九五八・一二）等、座談会やルポルタージュにより、芸術について政治的な問題点を世に問う記事を掲載。

⑤ 日本古美術・伝統文化の再検討

竹山道雄「大和紀行」（一九五五・一～九）の連載や、B2 9乗務者の持参リストをめぐる特集「文化財は日本爆撃からいかにして守られたか」（一九五七・一二）や、円空上人の彫刻の紹介特集「埋められた日本彫刻師の空白」（一九五九・一一）等。

⑥ 美術・音楽・文学・演劇各芸術分野の国内外の動向紹介

創刊以来、毎号巻頭に各芸術分野（美術・文学・音楽・映画・新劇・歌舞伎・ラジオ）について国内外の動向紹介する欄「藝術新潮」を設置。

以上のように、美術という専門的な一分野にとどまることなく、ジャンルの枠を取り払い、より総合的で横断的な「芸術の総合雑誌」を目指し、芸術に新しい視界を開こうとした点がうかがえる。また、その横断的特徴の反映のひとつとして、小林秀雄の他、永井龍男、今日出海ら文学者による美術批評の掲載が挙げられる。

文学者による美術批評の掲載は『藝術新潮』の編集体制の賜物と言えるが、文芸出版社ならではの文学者との強い繋がり、特に、創刊当初の編集部が、『新潮』と『小説新潮』編集部からの異動による編成であったことが大きく関係している。中でも、この雑誌の実質的な編集権が名編集者斎藤十一にあったことが大きかったと言える。小林秀雄も戦前から斎藤と関わりがあり、[6] 戦後最初期、斎藤の『新潮』編集長時代から、既に多くの批評を『新潮』に掲載し続けていた。特に、一九五〇年代にかけて小林は非言語芸術を対象とする批評に取り組んでいたこともあり、『藝術新潮』創刊後、『新潮』から批評発表の場を移していった。

四

小林が『藝術新潮』に発表したのは、「雪舟」（一九五〇・三）、「ゴッホの手紙」（一九五一・一―五二・二）、「近代繪畫」（一九五六・一―五八・二）、「鍔」（一九六二・六）、「バイロイトにて」（一九六四・一）等の多岐に亙る題材の批評や、「日本美術」（一九五〇・九）、「芸術批評について」（一九五二・九）等の座談会である。

『藝術新潮』の誌面の特色と照らし合わせると、戦後の新資料による西洋近代美術の再評価や、日本古美術・伝統文化の再検討に分類できる批評が中心と言える。特に一九五〇年代に長期連載した「ゴッホの手紙」「近代繪畫」は『藝術新潮』を代表する批評であり、西洋近代美術の再評価に関わる批評と言える。

このうち「近代繪畫」は、ラジオ講演を基とし、当初は『新潮』に連載、途中掲載誌を変更して四年に亙って『藝術新潮』に連載されたのち、人文書院より刊行された。戦後の絵画展の頻繁な開催による日本国内での絵画鑑賞機会の増加、洋書輸入再開以降の海外文献の容易な入手といった文化状況の激変に加え、小林は五〇歳にして初めての約半年に亙る渡欧[7]によって、絵画鑑賞と文献渉猟を行った。「近代繪畫」は、いわばこうした好条件の産物とも言えるが、この批評への評価としては、小林の代表作の一つとも集大成（中村光夫）とも評され、文学の分野のみならず、美術批評の分野においても大きな影響を与える一方、時代からの逃避（吉本隆明）として否定的な評価もされてきた。

「近代繪畫」はのちに章立てが整理されるように、批評家ボードレールと、モネ、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガン、ルノワール、ドガ、ピカソの七人の画家が取り上げられている。論者鈴木はこれまでのプレテクストの特定・検証によって、「近代繪畫」が、いずれの画家についても、非常に膨大な内外の文献を最新のもの至るまで徹底的に調査した上で、画家自身の書簡等を重視し、直接表出した生の言葉を咀嚼する最良の手段として、小林自ら原書にあたって翻訳を行うことによって、作品創造に立ち向かう芸術家像に焦点を当てた〈近代〉論であるという点を解明してきた。[8]

しかし今一度、発表媒体である『藝術新潮』の誌面に置きなおした時、「近代繪畫」が『藝術新潮』の中で、誌面上に掲載されている他の記事と呼応している点が見受けられる。

その一つが、一九五三年一月に『藝術新潮』に菊池重三郎による翻訳が掲載されたジャン・ルノワールの「回想のルノアール」（Jean Renoir,《My memories of Renoir》*LIFE*, June16,1952）である。息子ジャンによる回想録は、父親の生涯全般、実際には知りようもない父親の前半生についても描写したもので、「ルノワール神話」形成に大きく貢献をなしたものとして批判されることも多い。しかし小林は、そのような想像上の描写からではなく、実際にジャンが接した最晩年、死の間際のルノワールの言葉について、最も語り得る家族の証言として、注意深く引用している。[9]この文献からの引用は初版時に新たに章の末尾に加筆されたもので、それによって、死ぬ間際まで絵筆をとり続け、自己超克を志向していたことが強調される。ルノワールの最期は様々に描写されるが、小林が画家の最晩年の言葉として実際接した家族の証言を採用している点は、小林の姿勢をうかがうことができる。

また、『藝術新潮』に一九五〇年八月から六年に亙り連載されてい

たアンドレ・マルロー「東西美術論」（André Malraux, *Psychologie de l'art*（1947-49）、小松清訳）の存在も見逃せない。

例えば、*Psychologie de l'art* の第一巻 Le Musée Imaginaire の第三章のうち、モデルとタブロー（絵画）の比重が絵画にかかり、近代絵画が現れてきた過程での肖像画への言及の引用が認められるが、絵画における〈近代〉の問題を考える上で重要な箇所となっている。[10]

Psychologie de l'art 三巻はその後、*Les voix du Silence*（Paris, Gallimard, 1951）一巻本としてまとめられ、両者には大きな異同があるが、「近代繪畫」に引用された箇所は *Les voix du Silence* にする際、話の流れを時系列的に整えるためか、前後の文脈そのままに第五節に移されている。

Les voix du Silence については、小林の蔵書でも確認が出来、そこには、多数の書き込みもあり、小林がこの大著を熟読したことは間違いない。*Psychologie de l'art* の小松清訳は、『藝術新潮』に掲載されているものの、小林の引用とは異なることから、小林が原書に当たり、自ら訳したと考えてよいだろう。ただし、小林が創刊号から『藝術新潮』に批評を掲載していることから考えても、「近代繪畫」の情報源の一つとして、『藝術新潮』掲載の他作品への目配りをしていた可能性は大きい。小松訳の「東西美術論」もこの批評を識るきっかけそのものになっていた可能性が高く、原書の小林蔵書の書き込みを含め、詳細な検証の必要があると考えられる。

五

「近代繪畫」は〈現在〉の画家ではなく、既に一定の評価を得ている〈近代〉の画家を対象としている。一九五〇年代が、戦後の出発にあたり、〈近代〉美術館が次々と設立・開館され、〈近代〉美術展が頻繁に開催された時代であることを鑑みると、戦後の出発における〈近代〉の再検討という問題意識があったと考えられる。一九五〇年代の『藝術新潮』の誌面の特徴として、「戦後の新資料による西洋近代美術の紹介・再評価」の記事の多さが挙げられるが、小林の〈美術〉批評も、その文脈に置いた時、同様に、〈近代〉を検証した、アクチュアルな批評としての可能性が指摘できるだろう。

注

(1) 拙稿「小林秀雄『近代絵画』論――成立過程をめぐって――(1)」（「日本女子大学大学院文学研究科紀要」二〇〇四・三）、「小林秀雄『近代絵画』論――初出に見るモチーフ――」（「日本女子大学大学院文学研究科紀要」二〇〇五・三）、「小林秀雄『近代絵画』論――〈ゴッホ〉と〈ゴーガン〉の成立をめぐって――」（「文学・語学」二〇〇七・三）、「小林秀雄『近代絵画』論――〈ルノアール〉の成立をめぐって――」（「昭和文学研究」二〇〇七・九）、「小林秀雄『近代絵画』論――〈ドガ〉の成立をめぐって――」（「国文目白」二〇〇九・二）、「小林秀雄『近代絵画』論――〈ピカソ〉の成立をめぐる資料――」（「日本女子大学文学部紀要」二〇一〇・三）を参照されたい。

(2) 一九三〇年代創設の各文学賞に関しては、『近代文学合同研究会論集第1号　新人賞・可視化される〈作家権〉』（二〇〇四・一〇）を参照。

(3) 戦後の「〈文学的資産〉小林秀雄」運用の問題に関しては、山本芳明「〈文学的資産〉としての小林秀雄」（『文学』二〇〇四・一一）が、同時代評と文学史の関係性について論じている。

(4) 美術展の主催は、新聞社単独あるいは美術館とのタイアップのかたちをとることが多い。これは海外にはない日本の特徴と言える。

(5) 『新潮』での連載（一九五四・四～五五・一一）から、掲載紙を変更しての連載。掲載紙変更の理由は不明だが、『藝術新潮』連載時より、図版が付されるようになる。

(6) 小林秀雄と齋藤十一の親交の深さに関しては、齋藤美和編『編集者齋藤十一』（冬花社、二〇〇六・一一）を参照。

(7) 小林は一九五二年一二月二五日～五三年七月四日に、羽田―パリ―エジプト―ギリシャ―イタリア―パリ―スイス―スペイン―パリ―オランダ―イギリス―アメリカ（経由）―羽田の旅程で、朝日新聞社特別特派員として渡欧している。

(8) 注(1)に同じ。

(9) 「毎日、訪問客が絶えなかつた。父は、世間の出来事について、根ほり葉ほり、彼等に質問するのであつた。併し、父は、もうすつかり弱つて、痩せ細つてゐた。もし諸君が、その場に居合わせたら、訪問者達が出くはしてゐるのは、人間ではなく魂である、といふ感じを受けたであらう。だが、仕事は、しつかりつゞけられてゐた。死ぬ数日前、運転手に、アネモネの鉢を持つて来させた。色をつけながら、父はこんな事を言つた、この小品が、天国の大画家達への自己紹介の名刺がはりになつて欲しいものだな」（「ルノアール」（四））

《People called on him all the time and he questioned them about everything that was going on. Yet he was so weak and thin you had a feeling that you were being confronted by little more than a soul. But he kept right on painting. A few days before he died he asked the chauffeur to bring in a bowl of anemones. As he dipped into his colors to paint the flowers he said he hoped his little picture would be a suitable card to introduce himself to the great painters of heaven.》 p.53

(10) 「現存の或る大画家が、モジリアニをつかまへて、かう言つてゐるのを、マルローは聞いた事があるといふのです。「君の好きな様に静物を描き給へ。美術好きは大喜びさ。風景だつて好きな様にやるさ。これも大喜びだ。ところが裸体となると、もう彼は変な気を起し兼ねない……併し彼の肖像に手をつけたら事だ。君のタッチで、彼の口元でもやつてみ給へ。彼は腹を立てて飛び上る」

大多数の人々が、絵の好きな人達でさへ、自分の顔を描かれてみて、初めて、画家の魔術にかゝつた事に気が付く、何も彼も巻き上げられた事に気付くものだ、とマルローは註釈してゐます。」（「セザンヌ」（五））

《J'ai entendu un des grands peintres de ce temps dire à Modigliani: 《Tu fais une nature morte comme tu veux, l'amateur jubile; un paysage ,il jubile encore; un nu, il commence à faire une binette en coin; sa femme... ça dépend des fois; mais si tu te mets à faire son portrait, si t'as le malheur de toucher à sa gueule, alors, là, mon vieux, tu le vois bondir!》 C'est seulement devant leur propre visage que beaucoup d'hommes, même parmi ceux qui aiment la peinture, prennent conscience de l'opération magique qui les dépossède au bénéfice du peintre.》 pp.117-118

【付記】本稿は、日本比較文学会第五一回東京大会（二〇一三年一〇月、於早稲田大学）における口頭発表の一部に基づくものである。会場内外でご教示くださった方々に、記して感謝申し上げたい。

『藝術新潮』主な記事	新潮社の動向	社会・文学・美術
1 連載：イタリア古寺巡礼（和辻哲郎） 3 対談：日展を批判する（中村研一、伊原宇三郎、福島繁太郎） 7 特集：現代日本美術展（座談会）（今泉篤男、土方定一、富永惣一、田近憲三、河北倫名） 8 連載：東西美術論（アンドレ・マルロー（小松清訳））（～56・10）	1『藝術新潮』創刊―「見る芸術雑誌に加え読む芸術雑誌を目指す」編集権発行者＝佐藤義夫。編集に、斎藤十一、菊池重三郎、山崎省三ら。題字は金子鷗亭、表紙＝古沢岩美。	1 印刷用紙の配給・統制の撤廃 4『チャタレイ夫人の恋人』発売、性描写が話題に。 6 朝鮮戦争―特需で日本経済復興へ 7 金閣寺焼失。
1 連載：ゴッホの手紙（小林秀雄）（～52・2） 10 特集：ピカソ展（座談会）（山口遙香、福島繁太郎、岡本太郎、倉林正蔵） 11 特集：ロートレック―ロートレックのポスター、放蕩の貴族ロートレック（式場隆三郎） 12 特集：ルオー―ルオーのこと（福島慶子）、ルオーの版画（久保貞次郎）	8 新潮社創業者佐藤義亮没。	3 マチス展（国立近代美術館） 8 ピカソ展（日本橋・高島屋） 9 サンフランシスコ講和条約、日米安保条約 11 神奈川県立近代美術館オープン
3 特集：1951 年のピカソ（植村鷹千代）	11『現代文学全集』全 46 巻、刊行開始。	5 第一回日本国際美術展（東京都美術館）、メーデー事件 7 破壊活動防止法成立 9 ブラック展（東京国立博物館） 12 国立近代美術館、京橋に開館
11 特集：ルオー―ルオーの版画（岡本謙次郎） 11 座談会：（武者小路実篤、中川一政、林武、福島繁太郎）		2 ＮＨＫテレビ放送開始 3 吉田茂首相バカヤロー解散 10 ルオー展（東京国立博物館） 12「幻想と抽象」展（国立近代美術館） ※「第三の新人」の活躍
2 座談会：日展を批判する（中村研一、伊原宇三郎、福島繁太郎） 5 座談会：現代建築（丹下健三、吉阪隆正、清家清、勝美勝） 6 日本建築〈日本芸術シリーズ〉―座談会（岸田日出刀、吉田五十八、堀口捨巳、谷口吉郎） 6 新劇―翻訳劇ベスト5、グラフ新劇史、座談会（千田是也、滝澤修、杉村春子　司会：戸坂康二）ほか 7 特集：現代日本美術展―座談会（今泉篤男、土方定一、富永惣一、田近憲三、河北倫明）	＊朝鮮戦争後の反動不況により、出版会も不況に。文庫：全集の流行も終盤に入る。	2 マリリン・モンロー来日 3 ビキニ水爆実験 6 防衛庁設置法、自衛隊法公布 12 具象美術協会結成―吉原治良ら
1 連載：異色作家列伝1　ボーシュ（瀧口修三）（～55・12） 1 連載：大和紀行（竹山道雄）（～・55・9） 1 連載：日本の美（土門拳）（～55・11） 12 対談：第二次エコール・ド・パリ（末松正樹、海藤日出男）		4 現代イタリア美術展（神奈川県立近代美術館）、日米抽象美術展（国立近代美術館） 5 砂川闘争 ※「神武景気」始まる ※石原慎太郎「太陽の季節」芥川賞受賞 ※戦争責任論争
1 連載：近代絵画（小林秀雄）（ゴーガンの章から）（～58・2） 11 連載：世界の彫刻―空想美術館・序説（アンドレ・マルロオ）（～59・4） 12 具体美術宣言〈造形行動の新しい試み〉（吉原治良）	1 日本雑誌協会設立。理事：新潮社　佐藤義夫。 2『週刊新潮』創刊。 3〈新潮叢書〉刊行開始。	6 ヴェネチア・ビエンナーレ版画部門グランプリ棟方志功 11 世界・今日の美術展（日本橋・高島屋） ※「もはや戦後ではない」（『経済白書』） ※映画「太陽の季節」―石原裕次郎デビュー ※週刊誌ブーム（『週刊新潮』『サンデー毎日』等）
1 連載：日本芸譚　古田織部（松本清張）（～57・12） 3 特集：20 世紀のデザイン〈ヨーロッパとアメリカ〉―座談会（勝見勝、柳宗理、吉村順三、山田智三郎） 4 連載：芸術風土記1秋田（岡本太郎）（～57・11） 5 写真特集：現代建築の反省（写真＝大辻清司ほか）―座談会（竹山謙三郎、丹下健三、濱口ミホ、宮城音弥） 9 特集：日本芸術と文化官僚 11 アンオルメル本もの贋もの―座談会（今泉篤男、土方貞一、富永惣一、岡本謙二郎）、アンフォルメルの未来〈十三の省察〉（M・タピエ） 12 文化財は日本爆撃からいかにして譲られたか―ウォーナー・リストをめぐって（矢代幸雄）	3 日本書籍出版協会設立。相談役：佐藤義夫。	2 南極に昭和基地誕生 6 第一回東京国際版画ビエンナーレ展（第一会場＝有楽町・読売会館） 7 国会で日展批判「日展はボス組織で運営」 9 日本で国際ペン大会開催 10 ソ連、スプートニク1号打ち上げ成功 11 第 13 回日展―最後の官展 ※アンフォルメル旋風（８マチウ、９サム・フランシス、タピエ来日）
10 特集：ゴッホ展への招待―クロラー・ミュラー美術館物語（土方定一）、ゴッホ展をめぐる争奪戦 12 特集：文化勲章受章の内幕	3『藝術新潮』、第一回出版広告奨励賞受賞。	2 第二回国際具象は美術展 4 売春防止法全面施行 10 ゴッホ展（東京国立博物館）
4 特集：日本現代建築ベスト・テン―ルポルタージュ・それが代表的日本建築家（流政之） 5 連載：神々の変貌　世界芸術の創造（アンドレ・マルロオ）（～62・8） 11 埋められた日本彫刻師の空白（円空上人の彫刻）（榎本健規）、円空賛（谷川徹三）	5『日本文学全集』全 72 巻刊行開始。	4 皇太子ご成婚 6 国立西洋美術館開館 9 伊勢湾台風 ※「岩戸景気」

表　1950 年代における小林秀雄の文学活動および『藝術新潮』

	小林秀雄の主な文学活動	小林秀雄の動向
1950 48歳	1「秋」『藝術新潮』 2「蘇我馬子の墓」『藝術新潮』、対談「古典をめぐって」（折口信夫）『本流』（國學院大学） 3「雪舟」『藝術新潮』 4「表現について」『哲学講座第５巻』（筑摩書房）、対談「形を見る眼」（青山二郎）『藝術新潮』 6「文化について」『讀賣新聞』 9 鼎談「日本美術」（矢代幸雄、亀井勝一郎）『藝術新潮』	5 読売文学賞創設、銓衡委員になる 9 第一次『小林秀雄全集』（創元社版全８巻、～52・7）
1951 49歳	1「ゴッホの手紙」『藝術新潮』（～52・2）※『文體』廃刊により中絶していたが、改めて最初から連載。 1「真贋」『中央公論』 9「メニューインを聴いて」『朝日新聞』、対談「現代文学とは何か」（大岡昇平）『文學界』、『ドストエフスキイの生活』（創元文庫） 11「崑ちゃん」（清水崑『筆をかついで』（創元社）序文）、『私の人生観』（創元文庫）	3 第一次『小林秀雄全集』により、日本藝術院賞受賞。
1952 50歳	1「ヴァイオリニスト」『新潮』、「セザンヌの自画像」『中央公論』、鼎談「ヨーロッパ周遊」（岸田國士、谷伊之助）『群像』 5「『白痴』についてⅡ」『中央公論』（～53・1） 6「埴輪」『日本の彫刻Ⅰ　上古時代』（美術出版社）、『ゴッホの手紙―書簡による傳記』（新潮社） 9 座談会「芸術批評について」（吉川逸治、福田恆在、吉田秀和）『藝術新潮』 10 対談「現代文学の諸問題」（石川淳）『群像』	2「文藝春秋」創刊 30 年記念東京愛読者大会で講演 4「文藝春秋」創刊 30 年記念愛読者大会で講演（大阪・京都）、文士劇「父帰る」出演 12.25 今日出海とヨーロッパへ出発（「朝日新聞」特派員として）（～53･7･4）
1953 51歳	3「エジプトにて」『朝日新聞』 4「欧州便り」『創元』 10 日本文化放送にて「喋ることと書くことと」「近代繪畫について」講演 11「我が欧州作品」（寫眞）『藝術新潮』 12「ギリシア・エヂプト寫眞紀行」	1『ゴッホの手紙』により、第４回読売文学賞（文芸評論賞）受賞 5『小林秀雄・河上徹太郎集』（『昭和文学全集 13』角川書店） 7『正宗白鳥・小林秀雄』（『現代随想全集9』創元社）
1954 52歳	1「喋ることと書くこと」『新潮』、「自由」『朝日新聞』 3「近代繪畫」『新潮』（～58・2※） 4「ボオドレエルと私」（『ボオドレエル全集』（内容見本、創元社） 6「批評について」『NHK 教養大学』（ラジオサービスセンター） 7 放送「批評について」（聞き手：中村光夫）（NHK 第二放送教養大学「文學」7・6,13, 20,27） 8 座談会「滞欧よもやま思い出ばなし」（今日出海、田中千代、越路吹雪）、放送「批評について」（聞き手：永井龍男）（NHK 教養大学８・3,10 11「栗の樹」『朝日新聞』 12「美しい美術の吸収消化」『世界美術大辭典』（内容見本、河出書房）	2『小林秀雄文庫』（全５巻、中央公論社、～55・2）
1955 53歳	1「鉄斎Ⅲ」『現代日本美術全集　第一巻』（角川書店）、「ピラミッドⅠ」『朝日新聞』、対談「文學・藝術・人生」（伊藤整）『文藝』 3「ゴッホの墓」『朝日新聞』 4 対談「美の行脚」（河上徹太郎）『藝術新潮』 6「菊池寛」『文藝春秋臨時増刊号』、「志賀直哉の文学」『志賀直哉全集』（内容見本、岩波書店） 8「ハムレットとラスコオリニコフ」『新潮』 9「モオツァルトの音楽」『朝日新聞』（大阪） 11「文藝春秋と私」『文藝春秋』、「ギリシアの印象」『中央公論』、「鐵齋の扇面」『文藝　増刊号』（美術読本）、対談「美術を語る」（梅原龍三郎）『文藝』 12 座談会「志賀さんを囲んで」（志賀直哉、川端康成、丹羽文雄）『文藝　志賀直哉読本』	7『小林秀雄對話錄』（新潮社） 9 第二次『小林秀雄全集』（新潮社版全８巻、～57・5）
1956 54歳	1「近代繪畫」『藝術新潮』に掲載誌変更、放送「新春座談会　人生・文學・藝術」（正宗白鳥、今日出海）（NHK 第二放送）、放送「対談　音楽の窓」（野村光一）（NHK 第二放送） 2「ほんもの・にせもの展」「讀賣新聞」、座談会「古美術の干渉をめぐって」『日本文化財』（～56・4） 5 ドストエフスキイ七十五年祭講演（日比谷公会堂） 8「ドストエフスキイ七十五年祭に於ける公園」『文學界』（～56・10） 9 対談「映畫「ピカソ・天才の秘密」」（吉川逸治）『藝術新潮』	2『小林秀雄集』（『現代日本文学全集 42』筑摩書房）
1957 55歳	1 対談「美のかたち」（三島由紀夫）『文藝』 2「美を求める心」（『美を求めて』新潮社）、「鉄斎Ⅳ」（『鉄斎』筑摩書房）、鼎談「鉄斎を語る」（武者小路実篤、中川一政）「ＢＯＯＫＳ」 10 放送「座談会　面影を偲ぶ・中原中也」（大岡昇平、青山二郎、富倉徳次郎）（ＮＨＫ第一放送）	
1958 56歳	4 対談「ピカソ以後」（吉川逸治）『藝術新潮』、「『近代絵画』著者の言葉」（『近代絵画』豪華版、人文書院） 5「感想（ベルクソン論）」『新潮』（～63・6） 6「私の空想美術館」『文藝春秋』（～58・8） 9「蓄音機」『藝術新潮』 10 対談「芸術・人間・政治」（編集部）『週刊読書人』 11「ゴッホの病気」『藝術新潮』、『ゴッホ』（人文書院） 12『近代絵画』普及版（新潮社）	12『近代絵画』により第 11 回野間文芸賞を受賞
1959 57歳	1「ベレアスとメリザンド」『藝術新潮』、対談「文化の根底を探る」（中村光夫）（ＮＨＫ第二放送） 2「『近代絵画』受賞の言葉」『群像』 3 座談会「小林秀雄氏とのある午後」『年刊モーツァルト』 6「常識」『文藝春秋』 7「プラトンの『国家』」『文藝春秋』 9「読者」『文藝春秋』 10「漫画」『文藝春秋』、座談会「小林秀雄氏をかこむ一時間」『季刊批評』 11「良心」『文藝春秋』 12「歴史」『文藝春秋』	12 日本藝術院会員となる。

主要参考文献：『藝術新潮』、『小林秀雄全集』（新潮社、2001－2002）、『新潮社一〇〇年』（新潮社、2005･11）、市古貞次ほか編『日本文化総合年表』（岩波書店、1990･3）